立教大学ジェンダーフォーラム 第92回ジェンダーセッション

9/11以降のアメリカのフェミニズム
ジュディス・バトラーとトニ・モリスンを手がかりに

日時： 2024年7月5日（金）18:00～19:30
講師： 五十嵐舞氏（新潟県立大学国際地域学部講師）
会場： 本館1203教室 ZOOMウェビナーを用いた対面とオンラインのハイブリッド開催

2024年7月5日（金）18:00～19:30
立教大学 池袋キャンパス 本館1203教室

第92回ジェンダーセッション

9/11以降のアメリカのフェミニズム
――ジュディス・バトラーとトニ・モリスンを手がかりに

講師：五十嵐 舞（新潟県立大学国際地域学部講師）

わたしたちはどのように連帯できるか。繰り返し問われたこの問いは、2001年9月11日のアメリカ同時多発テロ事件以降、アメリカのフェミニズムにとって無視できない問いとして突きつけられた。アメリカ国内では、中東にルーツをもつ者やムスリムが「他者」として焦点化され攻撃の対象となる。対外的には、イラクやアフガニスタンの女性を救うことがアメリカ軍の中東侵攻を正当化する言説に使われ、アメリカの一部のフェミニストはこれに賛同してしまった。ジュディス・バトラーのプレカリティ論はこうした状況を背景に、フェミニズムの連帯の基盤を模索するものだ。本講演では、バトラーのプレカリティ論とトニ・モリスンの小説を手がかりに、今日まで続くアメリカの中東への暴力とフェミニズムについて考える。被傷性や哀悼可能性といった今や広く人文社会学の分析に使われるプレカリティ概念の可能性を、アメリカの「他者」を描き続けたモリスン文学との接続によって議論したい。

対面とオンラインのハイブリッド開催
定員　対面80名／オンライン500名
←お申し込みはこちら
https://s.rikkyo.ac.jp/fjxn6eqh
締切：7月3日（水）
定員に達し次第、受付を締め切ります。

主催・お問い合わせ：立教大学ジェンダーフォーラム
TEL：03-3985-2307　E-mail：gender@rikkyo.ac.jp
https://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/gender/

第92回ジェンダーセッションは、アメリカ文学、フェミニズム、クイア理論をご専門とされる五十嵐舞氏（新潟県立大学国際地域学部講師）をお招きいたしました。アメリカ同時多発テロ事件以降、いかにフェミニズムは連帯できるかを、ジュディス・バトラーのプレカリティ論とトニ・モリスンの小説を手がかりに探ることを企図した内容です。

まず五十嵐氏は、9/11以降のアメリカ社会の変化を氏の論考をもとに説明されました。ムスリムが「他者」化され、フェミニズムの名の下に米軍の中東侵攻が正当化されることに一部のフェミニストが賛同したこと、それによって起きた分断を機に、アメリカのフェミニズムはどのように連帯できるかという問いが生まれたと語りました。そして、その解決の糸口として、被傷性という共通の基盤を通じたジュディス・バトラーの「プレカリティ（生のあやうさ）」の論理が考えられる、だが、悲しみの経験から倫理の基盤を論じる議論には問題がある、例えばフロイトは『喪とメランコリー』で喪失を経験した存在は外的世界に関心を失うとしているし、ダグラス・リプンスの『哀悼と戦闘』は愛する者を失ったゲイ男性たちのエイズ・アクティビストに対して書いた文章である。バトラーが語りかける対象は直接愛する人を失ったわけではなく、その喪失に共感しイスラームへの暴力を容認してしまう合衆国国民であり、愛する人の喪失と9／11以降のイスラームに対する暴力をまったく別の出来事として想定している、このような点を考慮にいれながら、哀悼という情動がいかに論理的な応答に結びつくのだろうか、と問いを投げかけられました。そしてその問いの応答として、氏はアメリカの黒人女性作家でノーベル賞を受賞したトニ・モリスンの『ホーム』を引用・解釈しながら論じました。

『ホーム』に登場する黒人青年フランクは、朝鮮戦争での兵役を終えて帰国後、妹シーの消息を伝える手紙を受け取り、彼女のもとに向かいます。シーは、雇い主から暴行を受けて衰弱し、故郷ジョージア州ロータスに戻って女性たちの介護を受けますが、子どもが産めない体となります。シーの回復の過程を目の当たりにしたフランクの回想には、戦時下の性暴力を匂わせる記述もあり、妹の受けた傷から自らの加害性を再認識するくだりもでてきます。一方で、シーと彼女を手当しているロータスの

女性たちからは、黒人女性たちのフェミニズムが女性解放に貢献しうる可能性も示唆されると氏は語りました。

講演後の質疑応答では、内容の再確認が多くを占めたものの、ロータスの女性でシーの世話をしているサラの心情を基軸に別の角度からの解釈もできるのではとの質問も飛びました。アンケートからは、分断の進む世界で、文学批評から解決の糸口を見出そうという氏の真摯な姿勢に共感を得たという意見もありました。

分断が進む世界でいかに人々は連帯できるのか、これはフェミニズムのみならず昨今の情勢を受けてさまざまな分野で立てられている大きな問いであることに疑いはありません。その問いに答ようとするのは、相手に共感できる人間の想像力の可能性が試されているのと同意ではないのでしょうか。一方で想像力の限界を嘆くだけでなく、その潜在力に賭けることで混沌とする世界情勢のなかでの一縷の希望を見いだしたい気もします。そのときに小説はいかに寄与できるのでしょうか。いうなれば、氏の講演は、現代社会における人文学の意義の再考を聴衆に迫ったのではないでしょうか。私たちは文学をとおしていかに連帯できるのか、氏はそんな大きな宿題を我々に突きつけたのだ、そう捉えざるを得ない講演でした。

＜参照＞

五十嵐舞「「喪失」からはじめる――J.バトラー 生のあやうさ』「暴力、喪、政治」における倫理の端緒」『女性学』24、2017年、pp. 44-64

五十嵐舞「性暴力を認識した後に――トニ・モリスン ホーム』における性暴力の加害性と9/11後のフェミニズム」『黒人研究』90、2021年、pp. 6-15

（ジェンダーフォーラム事務局　佐野敦子）